

林 香里著『マスメディアの周縁、ジャーナリズムの核心』（新曜社 2002年）

森千春

堂々としてかつ清新なジャーナリズム論である。

理論的考察がねばり強く展開されており、

日本、ドイツ、米国にまたがる具体的な事例研究も豊富である。入念な準備をととのえ

「ジャーナリズムの核心」に迫ろうとした本

といえる。

筆者は、現在、東京大学大学院社会情報学研究所で助教授を務める研究者。主に日本とドイツで研究をしてきた。この本は、博士学位論文に加筆修正して世に問うたものだという。ジャーナリストが体験を報告するのではなく、学問の世界から発せられたジャーナリズム論だ。(筆者はロイター通信社東京支局英文経済記者の経歴もあるが、この本では当時の話は出てこない)

学問的な著作らしく、本書は、まず「ジャーナリズム」の定義から議論を始めている。最初に清水幾太郎による定義が紹介される。「一般の大衆にむかって定期刊行物を通じて、時事的諸問題の報道および解説を提供する活動」というものだ。この常識的な定義では、ジャーナリズムが「定期刊行物」というメディアと結びついている。だが、筆者は、「ジャーナリズム」と「マスメディア」は峻別すべきだと説く。筆者は、先行する諸研究を踏まえつつ、ジャーナリズムを一種の「意識活動」あるいは「言説空間」としてとらえる。

無論、筆者も、19世紀以降、産業化したマスメディアがジャーナリズムを形作ってきたことを等閑視するのではない。筆者は、マスメディアが作ったジャーナリズムを、〈マスメディア・ジャーナリズム〉と呼ぶ。ただ、ジャーナリズムの「萌芽」は、すでに17世紀に生まれたとして、ジャーナリズムには、当時からの連続性があると主張する。

こうした用語をめぐる議論は、筆者が「マスメディアの周縁」に「ジャーナリズムの核心」を捜すための布石だ。

「ジャーナリズムの意識とはむしろ、マスメディアの周縁に宿るのではないか」。筆者によれば、これこそ本書の「中心的問題意

識」なのだ。

ただし、筆者は、いきなり「マスメディアの周縁」におもむきはしない。

この本の第一部は、「大衆化」と「システム化」という二つの概念をキーワードに、現代社会のマスメディアの実態を分析する。

『大衆化』は、英国の新聞の変遷を通じて分析される。すなわち、フォーラムの役割を果たした活字「ジャーナリズム」が、19世紀から20世紀にかけて、「市場における経済的自由主義の原理に支配され、別の機能と論理をもつ『マスメディア』というシステムとなって凝固していった」のだ。

一方、『システム化』の分析は、ドイツの社会システム理論研究者、ニコラス・ルーマンの議論を手がかりとしつつ展開される。ルーマンは、その晩年、マスメディアをとりあげた *Die Realität der Massenmedien* という論文を書いた。本書は、ルーマンのシステム論とマスメディア論を、次のように紹介している。

「ルーマンのシステム理論によれば、自律したシステムが観察を行い、自らを環境から区別するには、『二元コード』という仕分けに介在する鍵が必要になる」「マスメディアにとっての二元コードとは何だろうか。ルーマンは、マスメディア・システムが外界と自己を区別するコードは『情報/非情報』である、と述べている」「ルーマンによれば、マスメディア・システム内部においては、いかなる個人にも、情報/非情報の決定を下すことができる余地はほとんど残されていない」。筆者によれば、こうした議論は、「マスメディアのシステムに組み込まれた個人が、システムから自律して主体性を確立すべきことを主張する規範理論」に対する、ルーマンによる批判ともいえる。

さて、評者は、筆者のいうところの〈マスメディア・ジャーナリズム〉に身を置いている。筆者による要約を通じて、ルーマンのマスメディア・システムの描写に接して、「うまいこと言うなあ」と感嘆する一方で、ある種の概嘆も禁じ得なかった。「これでは夢も希望もないではないか・・・」

筆者は、今日なお、ジャーナリズムに希望を託しうる、という立場をとっている。ルーマンの議論を、マスメディアの現状分析としては高く評価しながら、そこにとどまらない。筆者は、「マスメディアでないジャーナリズムも存在するはずである」との信念を吐露して、議論を先を進めている。

第二部において、筆者は、現代ジャーナリズムの思想を理論的に考察する。「われわれがなおジャーナリズムという活動を重視し、それに希望を託そうとするのならば、その希望を支える思想にはどのようなものがあるか」が、テーマである。

筆者は、これまでのジャーナリズム（〈マスメディア・ジャーナリズム〉）は、17世紀の近代市民社会に端を発する古典的自由主義思想を、その思想的根拠として発展してきたとしつつ、それにあきたらず、「現代のジャーナリズム活動の意義を再発見できると考えられるいくつかの思想や理論」を取り上げる。その範囲は広い。ハーバーマス公共圏理論に影響を受けた「オルターナティブ公共圏」の議論。20世紀前半のアメリカの哲学者、ジョン・デューイの思想。コミュニタリアニズム（共同体主義）。デリベラティヴ・デモクラシー（討議を重視するデモクラシー）。読者は筆者に導かれて、第二部において、民主主義をめぐる原理的な考察にどっぷりと浸かることになる。

こうした脇固めを経て、筆者は、第二部、具体的な事例研究に進む。とりあげられる「メディアの周縁」の例は、日本の新聞の「家庭面」、ドイツの『ターゲスツァイトウング』、米国の「パブリック・ジャーナリズム」の三つだ。

筆者は、日本の新聞に、「激しい発行部数拡張競争を展開しながら産業として成長することによって、その言論機関としての存在力を社会に認めさせ、影響力を高めてきた」と一定の評価を与えている。欧米の新聞の上澄みを賞賛しつつ日本の新聞を一刀両断で切り捨てる――といった、しばしば見受けられる乱暴な議論とは、無縁だ。それどころか、マスメディア論の死角になりがちなところ、すなわち「家庭面」に日本の新聞の希望を見いだしている。「家庭面」において、「読者と記者の連携によって継続的なキャンペーン報道を行うジャーナリズム空間が存在してきたことに意義を見出している。

日本とならんでドイツを拠点として研究活動をしてきた筆者は、次に、1979年に創刊されたドイツの日刊紙『ターゲスツァイトウング』（『タッツ』）を取り上げる。筆者によれば、オルターナティブ公共圏創造を目指して、若者たちが行っていた様々な試みが結集する形で、この新聞が生まれた。『ターゲスツァイトウング』のこうした社会運動体としての誕生と、その後「メディア・インスティチューション」になるまでの過程が描き出される。

筆者は、『タッツ』の軌跡をふりかえったうえで「『オルターナティブ公共圏』という思想を社会に呈示してきた」と高く評価する。しかし、一方で、「質が高い取材活動にはお金と時間がかかるが、そのための経営基

盤が決定的に弱い」という弱点も指摘して、「日刊全国紙という媒体は、オルターナティブ性を発現させるには困難な条件が多い」という、現実的な認識も示している。

筆者は、ジャーナリズムが民主主義の再生に貢献できるはずだという希望を抱きつつ、その希望の芽は、既存の条件の中で育まなくてはならないと信じていると思われる。『タツツ』をめぐる論考に、こうした筆者の姿勢がよく読みとれる。それはまた、米国の「パブリック・ジャーナリズム」をとりあげる際にも一貫している。米国の地方メディアが取り組んでいる「パブリック・ジャーナリズム」の重要な手法は、メディアが住民と協力し、地域の問題に関する討議を開催し、その討議を報じるというものだ。

本書は、現代におけるジャーナリズムの希望を追求しているのだが、日本の新聞の「家庭面」をとりあげたことに端的に表れているように、筆者は、大組織を切り捨ててはいない。組織内ジャーナリストにも一考を促しているといえる。

評者もその一人として、様々考えさせられた。ただ、本書の議論で、腑に落ちない点があった。それは、〈マスメディア・ジャーナリズム〉の思想的根拠である古典的自由主義思想に対して、筆者が与えている厳しい点数である。この思想的根拠から、ジャーナリズムの様々な規範、たとえば「客観的な報道、中立性、報道と意見の峻別」が導き出されている。ところが、筆者は、「これらの諸規範は今日、ジャーナリストたちの柔軟な発想や

活動を妨げたり、社会との深刻なコンフリクトを引き起こしている」と断じる。「柔軟な発想を妨げ」ていることまでは理解できるが、後段は、にわかには納得できない。筆者がいうところの諸規範は、ジャーナリストが、プロの書き手として活動する上の心得として、いまだに有効ではないのだと、評者は考える。

筆者自身が、本書で、『タツツ』が試行錯誤を繰り返す中でその編集局内では「プロのジャーナリズム」を確立すべきだという声が強くなったという、興味深い事実を報告している。『タツツ』の記者たちもまた、既存のジャーナリズムのよき点を再認識したはずだ。

筆者は、今日の状況について、「市民に開かれたジャーナリズムというものが生きている場所は、マスメディア・システムの最周縁にのみ残されている」と言う。しかし、「周縁」にこだわるあまりに、「中心」が持っている可能性に、あまりに早く背を向けているという疑問が残る。評者は、現在の〈マスメディア・ジャーナリズム〉が抱える問題のかなりの部分は、むしろ、古典的自由主義思想に根拠を持つ諸規範が十全に機能していないことから生まれていると考える。

「中心」においては、古典的自由思想が持つ可能性を蘇生させ、ジャーナリズムのモラルを維持しつつ、「周縁」において芽生えた可能性を育てていく――〈マスメディア・ジャーナリズム〉の現場でそのような夢を抱くことは、果たして不可能なのであろうか。